

「確かな学力」を身につけさせる学習指導の研究

～「学級力」を高め、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して～

I 研究内容

1 「学級力向上プロジェクト」の実践の継続と、授業との関連付け

「学級力向上プロジェクト」が継続していくように取り組み方法を教師間に伝え、浸透させていく。また、学級づくりのための話し合い活動である「スマイルタイム」の進め方の共通理解を図っていく。さらに、授業との関わりについて研究授業等で検証していく。

2 各教科への実践の広がり

昨年度まで研究をしてきた算数科だけでなく、各教科でも研究実践を行う。その際、過去2年間で培ってきた授業づくりの方法が、各教科にも当てはめられるのかどうかを検討する。

3 指導と評価の一体化に関する継続した検討や実践

昨年度までの課題を引き継ぎ、より良い評価の場面や方法について検討、実践をしていく。

4 学校と家庭とが連携した家庭学習の取り組み

学習を効果的に進めていく上で、学校と家庭との学習が有機的に結びつき、車の両輪として機能していくことが求められる。その中で、全校体制で実践することができ、学校と家庭が同じ方向を向いて取り組んでいけるような、より良い方法について検証していく。

II 具体的な研究活動

1 「学級力向上プロジェクト」の実践の継続と、授業との関連付け

(1) 「学級力向上プロジェクト」の学習会

(2) 「スマイルアクション」(学級力向上のために取り組む具体的な活動)の授業との関連付け

(3) 「学級力向上プロジェクト」の実践計画の確認

(4) 「学級力向上プロジェクト」の報告会

2 各教科への実践の広がり

(1) 算数科と社会科の研究授業、研究会の実施

(2) 一人一実践(算数科・算数以外の各教科)の実施

3 指導と評価の一体化に関する継続した検討や実践

(1) 「課題把握→自力解決→相互解決→振り返り」の授業モデルを基にした実践の継続

(2) 研究授業において、指導と評価の一体化を意識した指導案作り

4 学校と家庭とが連携した家庭学習の取り組み

(1) 家庭学習の内容や取り組み方法の検討

(2) 八のつく日を軸にした家庭学習の振り返り活動の実施

(3) 全校体制での自主学習へのフォロー

(4) 各家庭へ取り組み方法を周知するための「日下部の学び」の発行

5 その他

(1) ICTを活用した教材づくりや児童の思考の交流の工夫

(2) 教師対児童の対話を軸に授業を深める「問い返し発問」を意識した授業実践

Ⅲ 成果と課題（○成果 ●課題）

1 「学級力向上プロジェクト」の実践の継続と、授業との関連付け

- 日々の実践の中から、学級力と授業が密接に関連しているということを感じることができた。学級力と授業を車の両輪としてとらえ、今後も実践を重ねていく必要がある。
- 「スマイルアクション」に、授業に向かう姿勢を意識した取り組みを設定したことで、授業での発言等、児童に変容が見られた。
- 「学級力向上プロジェクト」の進め方の学習会を設定したことで、初めて取り組む教員への周知が図られ、ある程度足並みのそろった実践を行うことができた。
- 研究内容に含まれなくなった時に、どのように継続して取り組んでいくか体制づくりが必要。

2 各教科への実践の広がり

- 算数科での実践の積み重ねを各教科への実践に生かすことができた。
- 一人一実践を行う中で、国語科・英語科・音楽科等の算数以外の各教科への実践の広がりが見られた。また、参観を行うことで、各自の実践への還元も図られた。
- 各教科の「見方・考え方」を働かせた深い学びについては、今後も実践を重ねていく必要がある。

3 指導と評価の一体化に関する継続した検討や実践

- 「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」を明確にしながら指導計画を作成し、評価を授業改善につなげることができた。
- 「課題把握→自力解決→相互解決→振り返り」の授業モデルが算数科だけでなく、算数以外の各教科にも当てはめることができることを確認することができた。
- OPPシートを活用した実践から、色々な振り返りの形を知ることができた。
- 算数科以外の各教科にあった振り返りの形を検討していく必要がある。

4 学校と家庭とが連携した家庭学習の取り組み

- 家庭学習の取り組み内容や方法を全校で統一したことで、各家庭に協力をお願いしやすくなった。
- 自主学習や八のつく日の振り返りに全校でフォローできる体制をつくったことで、学級担任の負担感の軽減につながった。
- 八のつく日に家庭学習の取り組み状況を集計し、月末に個票を児童に返し、翌月に生かすというサイクルを確立することができた。
- まだ、十分に連携が図られている状況ではないので、今後も取り組みを継続しながら、各家庭に取り組み内容を周知していくことが必要に思われる。

5 その他

- タブレットや大型モニターを活用し、教材や児童のノート等を提示することで理解を助ける手立てとなった。来年度からは、GIGAスクール構想で機器が充実してくるので、現時点よりも活用され、さらなる授業改善が図られることが期待できる。
- 「問い返し発問」の使用が、児童の課題への意識を高めることや、理解の助けとなることにつながり、授業の目標に迫る有効な手立てとして活用することができた。
- 「問い返し発問」に関しては、今後も日々の実践の中で意識して使っていくことが求められる。どの場面で、何のために問い返すのかをイメージしながら問い返すことが必要。

Ⅳ 成果物

- 1 学級力向上プロジェクト実践資料
- 2 研究授業指導案（5年算数「単位量あたりの大きさ」・3年社会「火事からまちを守る」）
- 3 一実践指導案
- 4 家庭学習に関する資料

（研究主任 飯室 林）